

運命の赤い瞳 Special Edition

風の少女

CONTENTS

PROLOGUE.....	3
風見る瞳.....	8
傷ついた剣.....	22
選んだ未来.....	50
妖しき少女.....	66
紛い物の剣.....	86
早苗.....	114
着火する運命.....	152
EPILOGUE 旅立ちの朝に.....	189

登場人物紹介

東風谷早苗

守矢神社の風祝を務める 17 歳の少女。半人半神の現人神と呼ばれる存在であり、幻想郷に迷い込んだシンを気にかける。

シン・アスカ

“デステイニー”と共に幻想郷に転移した、別世界の少年。17 歳。にとりに助けられ、元の世界へ帰るために幻想郷を奔走する。

河城にとり

妖怪の山のふもとで作業場を構える、河童妖怪の少女。外見は幼く生意気な口ぶりだが、メカニックの才能は幻想郷随一のモノ。

古明地さとり

幻想郷に地下深くに存在する地霊殿の主。他者の心に巣食うトラウマを自在に操る力を持つ『嫌われ者のサトリ妖怪』。小柄だが、その双眸と胸元に存在する第三の瞳の圧迫感は底知れない。

洩矢諏訪子・八坂神奈子

幼少時に両親をなくした早苗の親代わりの存在。西暦世界から幻想郷へ来て肉体を得た、八百万の神々の二柱。

霊烏路空

八咫烏の妖怪の少女であり、地霊殿に棲むペット。神奈子によって核エネルギーを操る能力を獲得している。

PROLOGUE

私、東風谷早苗の過去には、ノミで練り抜かれたような歪な穴が開いている。

幻想郷と呼ばれる異世界に向かうよりも前、最後に見た、『私の世界』での夕日。アスファルトの上に力無く横たわる少年が必死に右腕を伸ばしながら私の名前を呼んでいた。

少年は震えた口で心細く何かをつぶやいている。夕焼けを受けて僅かに橙色に輝くアスファルトを、全身からとめどなく流れ出る血が赤黒く無慈悲に塗りつぶす。すぐ近くには横転した大型トラックがあった。少年を突き飛ばした衝撃は、例え受けたのが屈強な男でも只事では済まない。現にその顔は苦痛を湛え、絞りだされる途切れ途切れの呼吸音は、消え入りそうな彼の命を如実に表していた。

私は殆ど見ているだけしかできなかった。最低限の応急処置と病院への連絡を行っただけ。彼の怪我をどうこうできる知識と技術を持ち合わせていない自分には、これが最善の手だった。その程度の事しかできない、無力な自分を痛感する。涙すら流せず、踏ん張る力さえも抜けて地面に身体を預けることしかできない。

仄暗い虚無感に支配されている私にこれ以上できるのは、消え行きそうな彼のわずかばかりの笑みにむけて、ただ視線を合わせることだけだった。

「——え、——ちゃ……」

少年が何かを口にした。聞き漏らさまいとしても少年が自分に何を伝えようとしているのかわからない。それだけか細い声だった。

悲しみ、焦り、不安。これらで心臓が異常に高鳴っているのも原因だろうか。嘘だと信じたい光景に圧倒され、私の脳は目の前の現実を拒否していた。声を聞こうとしても、頭に入らない。

だが脳が彼の現状を拒否しようとしても、これは紛れもない現実。その溢れすぎた赤い液体が示すのは遠からず少年が死ぬことを意味する。ならば彼の最後の行動を受け止めねばならない。その使命感が私を正気に保たせていた。その残った命を振り絞って、血塗れの彼は必死に懐を弄もよほって何かを私に差し出し、咄嗟まはやくに両手で受け取った。

「これ、プレ、ゼント……さよなら、早苗おねえちゃん」

それまでのどの言葉よりも、鮮明だった。その声が最期に振り絞った少年の力だった。彼は目を閉じてそれきり動かなくなる。その瞬間私は彼の死を悟った。だが、慟哭に苛まれることも、絶叫を上げることもなかった。ただ、ただ際限ない虚無感に身を包まれて、何回か彼の名前を呼んで『少年が死んだ』という事実が変わらないことを理解した。

彼の遺体に、既にもいない私の両親の笑顔がオーバークラップする。そんな、嫌だ。人の死を目

にするのは初めてじゃない。初めてじゃないからこそ、その瞬間自らを抱きしめながら自分へ言い聞かせるように叫んだ。心を乱すな、落ち着くんだと。

私は少年からのプレゼントを受け取った震える手をもう片方の左手で押さえつけた。

ふと右手の掌を覗いてみた。彼から渡されたプレゼントに触れた掌からぬるり、とした感覚を覚えたのだ。……右手は赤い彼の命で濡れていた。

「そんな、嫌だ。嫌だよ」

徐々に大きくなるショックで動けなかった私は、周囲に視線を移す。いつの間にか通りすがりの住人が集まっていた。その中の一人の女性が「怖かったね、つらかったね」と柔らかな声をかけながら私を警察に預けた。その後よく覚えていなかったが、しばらく事情聴取を終えた後自宅である守矢神社へと送られた、と思う。

陽が落ちた境内の参道で、少年から渡されて警察からの事情聴取の間も握りっぱなしだった掌の力を解いた。彼が遺した、チェックの紙の包み。それも半分の面積が血で濡れていた。警察の人から渡されたタオルで帰る時までには手から拭き取っていたが、彼の血の跡が包みにこびりついていたことが、脳内で絶え間なく『現実』だと主張している。

「……」

それを……プレゼントの包みを開けてみた。

そこに入っていた物を見て、私は瞳を濡らした。震える肩、湧き上がる鳴咽。収まらない感情。世界のすべてが暗く見えて、全身が震え、悲鳴を上げ始めた。堪らえようと溜め込んでいた感情が溢れ出した。

初めて家族以外でできた、自分と親しかった人間。弟のような友達。そして——あまりにも無残な突然の別れ。

ひとしきり泣いた後自室まで覚束ない足取りで辿り着き、和風建築の木製の壁に身体を預けながら泣き続けて……流す涙もなくなった私は再び立ち上がる。

この世界が嫌いだ。こうして唯一心残りだった友達の子供も、自分の目の前からいなくなってしまった。だから早苗は心に決めていた。

私達神の存在を否定した世界、科学の発展にあぐらをかいて愚かしく信仰を蔑ろにするこの世界からの脱出。

私の中にある、二つの神を生かすための儀式への決心。この世界への未練ももう持ち合わせていない。

——本当に良いの？

「諏訪子様」

私の内側から声が聞こえる。子供のように高くて明るいこの響きは、諏訪子と名乗る守矢神

社に祀られている神の一柱だ。私は、首を縦に振る。

旅立てば、二度と『東風谷早苗の生まれた世界』の夜明けを目にすることはなくなるだろう。私は涙で赤く腫れた両目をこすり、涙を振り切って窓から夜空を見上げる。

「はい。神の存在を消し去らないために……神である自分で、いるために。……もう私を、他の誰とも変わらない、只の人間として見てくれる人などいないのですから」

東風谷早苗、過去の私は涙に濡れた瞳を閉じ、自室の窓の外から見える世界の景色を遮断する。

あの日——元の世界で最後に過ごした夜から。以来、私は私の最後の友達であった少年の姿も、声も、その最後の消え入りそうな笑顔も。もう思い返さないと決めたのだ。

風見る瞳

幻想郷と呼ばれる世界。外界と隔絶された異空間の中にあるその世界は、自然豊かな光景が広がっている。その木々が絨毯のように眼下に広がる世界の中で、一際天に向かつてそびえ立つ山がある。その山は幻想郷の住民の間でいつしか「妖怪の山」と呼ばれるようになり、その山頂には守矢神社と呼ばれる、幻想郷の外の世界から転移してきた神社が聳えていた。

「早苗！」

その守矢神社の敷地の外から徒歩数分程度。山頂の一角で名を呼ばれ、風を受けていた長髪の少女は、冷たい朝に身を晒しながら、無意識に思い出していた痛ましいプレイバックから我に返った。風に靡く横髪を抑えつつ背後へ振り返る。

「ここにいたんだ早苗……もう、早苗はいつも早起きだね、気付けばいつの間にか神社の外に出ていて、朝日を眺めてる」

夜明けの光を背にしてそう言われた早苗は笑顔を返した。目の前にいるのはカエルの意匠を取り入れた特徴的な帽子をかぶり、桑の実色の上着とスカートで子供のような幼い表情と仕草で声をかけてくる洩矢諏訪子だ。

——朝から暗い顔じゃ、ダメだよね。

「おはようございます諏訪子様。私は朝日を見るのが好きな事、今更じゃないですか。諏訪子様もいかがです？ そのうち好きになるかもしれません」

早苗は自分より背の低い諏訪子に対し、視線を落としながら嬉しそうに言う。早苗の背丈は標準的な女子のそれだが、諏訪子の方は人間の齡で言えば十にも満たないものに見えるくらいに幼い身体だ。

「私の趣味じゃないよ……でもま、私と神奈子は、早苗の世界^西では身体が無かったから『お日様の光を浴びる』って感覚がよくわからなかったけど、たまりなら、悪くないかな」

神が人と同じく大地を踏むことのできる世界。幻想郷は早苗の世界に存在する常識から『非現実的』という言葉で片付けられていた理^{ことわり}を、簡単に覆す世界だった。数ヶ月前、早苗達は元の世界から次元を越えて幻想郷に来了。こんな山の上に早苗達の神社、守矢神社が存在するのも、次元転移の偶発的な結果が理由だ。だが早苗はここが気に入っている。

早苗がいる妖怪の山の頂は、幻想郷の中でも有数の絶景スポットだ。ここからだ夜明けを目にするのはきつと幻想郷の誰よりも早い事だろう。

朝日を眺めるのは、早苗の日々の楽しみで、それが守矢神社イチの早起きの原因だった。涼しさを体全体で感じた後、社務所に戻って共に住んでいる洩矢諏訪子、八坂神奈子の分も含めた朝ごはんを作る……今日もそんな手筈だった。しかし、諏訪子は珍しく早起きしてここにや

つてきたのだ。ただの気まぐれで来たのかもしれないが、諏訪子が早く起きたからといってご飯より前に自分の元へ来るのは本人の性格をよく知る早苗には意外だった。

「さてさて、いつも私が声をかけるまでお休みなさっている諏訪子様が、わざわざここまで歩いてくださるとは。……まさか、私と同じように山頂の夜明けを楽しむことに目覚めたって訳ではないですよね」

「いや、私、洩矢諏訪子ののんびんだらりな性格。よくわかってるじゃない早苗。こうして幻想郷に来てから肉体を持つと、人間と同じようにお腹は減るとか、疲れる事にまだ慣れないんだよねー。結果、寝ることが一番になってしまう。がっはっは」

「……もう。寝たきり隠遁になるには諏訪子様はまだまだ早すぎますよ。お身体も子供のソレですし。いくら神様で人間の何倍も生きてきたとはいえ、その姿でそんな元気の無い生活は褒められたものじゃありません」

「私は神様だよ？ 普段の生活程度で病気になる人間とは違うって」

幻想郷では、人間でない生物が人間の姿をとっている存在は、纏めて『妖怪』と呼ばれている。妖怪は人間の数十、数百倍の寿命を持ち、神である諏訪子もその枠に入る。

「少ししか生きられない人間を守る立場をずっと務めてきたんだし、だみん惰眠を少しくらい味わったって別に悪いことじゃ——」

「だ、め、で、す。そんなことは例え神様でも、この守矢最後の末裔、東風谷早苗は許しません。食って寝て生きていてはつかじや、病気にそう簡単にならないとは言え、やがてブクブク太って酷い目に遭いますよ。……妖怪の身体だって別に不老不死とかの完全生物ってわけじゃないんですから」

彼女、諏訪子は早苗にとつての神様だった。「神」と言うのは別に存在の比喩ではなく、本当に諏訪子は人間とは異なる種族の生物『神』の一柱ひとしらであり、早苗が風祝として務めている守矢神社の祭神だ。そして守矢神社は祭神を二つ祀っており、もう一柱は八坂神奈子と言う。

風祝かぜはふりは祭祀を司る古くからの役職の名だ。先代の風祝は早苗の母で、彼女が死んだ後に早苗は風祝を継いだ。物心付く前から神社で早苗を見守っていた諏訪子達二柱からすれば、早苗は娘のような存在であり、早苗にとつても諏訪子達二柱は母親代わりの存在だった。諏訪子は、自分の幼い姿では早苗の妹にしか見えないかもと気にしているようだが、何故か神奈子は成熟した女性の姿をしている。妖怪というのは実体を持った時点で魂の特性に影響された体躯を表すらしいとこの世界の書物に記されているが、元は同格の神である二柱が、ここまで極端に姿が異なることに対して、早苗は不思議でならなかった。

二柱に対する理不尽を思うのはそこまで留めて。ふと早苗は諏訪子がここに来た理由を考えた。本人も朝は苦手だと言うからに、今朝は何か余程の事があつて来たのだと察する。覚え

があるのは、幻想郷の巫女、博麗霊夢がこの神社に来るということを聞きつけた時以来になるが……

「ま、その時はその時だよ。ああ、そういえば早苗！ 確か元の世界でロボットのアニメとか見てたよね。神奈子がアドバルーンの建設をこの山のふもとでやっているのは覚えてる？」

「え、ええ……神奈子様、ここ最近妖怪の山の麓へと降りっぱなしですね。時間あれば河童達のところへ行っているみたいですし。ヒソ、テン……なんとかって言う物の製作の監督役を務めているとか」

「非想天則。神奈子が名付けたんだから忘れてると悲しむぞ？ まあ、早苗はあんまし興味ないのかな、やっぱりただデカイだけのハリボテじゃ」

「いいえ、全く興味が無いわけじゃ。でも、その程度の物、って思っていました。神奈子様から聞いた限りでは里の広場に飾る予定らしいですが……」

巨大ロボットは動くものだという認識が、早苗の中では鉄板だ。早苗の感性と神奈子の感性はある程度似ているらしく、神奈子も巨大ロボットは好きらしかった。まさか、巨大なアドバルーンとして……つまり早い話が全長二十メートル以上の特大サイズのハリボテを作ろうと、妖怪の山ふもとの河童に依頼していると初めて聴いた時は耳を疑ったものだ。子供のような夢を掲げて、河童を使ってまで現実にしようだなんて早苗は思いもなかったからだ。

まさか、その話の類か？ 早苗はアドバルーン絡みの話には神奈子から辟易するぐらいに聞かされた経験がある。このタイミングで河童の一部が激務でドタキャンした、とか、神奈子の部屋にあるロボットじゃアドバルーン向けじゃないから早苗の部屋に何か参考になるマンガがないか、とか。食事の時でも常に聞いてきたのだから、早苗も少々困りあぐねていた話題だった。

「ちがうよ、多分早苗が考えてるのは全然違う。これは幻想郷の一大事だよ！ 山の天狗がわざわざ来てまで教えてくれたんだ、ついさっきね」

「噂好きの天狗……もしかして、文々。新聞の射命丸文さん？」

「たしかそんな名だったっけ。私、普段関わり薄い幻想郷の人妖ひよとを覚えるのは苦手でね。どうにもイチイチ覚えてらんないんだ」

「まさか。ボケにはまだ早いですよ」

「どんなツッコミよ！！ 私はまだ少女……って、そんなことはどうでもいいのッ」

諏訪子は紙を取り出し、早苗の目の前に突き出す。新聞だ。そこに写っていたのは号外と触れ込みのついた記事が描かれており、その右上の見出しの部分に掲載されているのはモノクロの写真だ。これが文から渡された新聞だろうか。

そこに写っていたモノを目にし、早苗は自分の何かが大きく震えた。

「これは……」

ロボット。巨大なロボット。そうとしか形容できない人型の建造物がふもとの河原らしき景色の中でうつ伏せに倒れていた。画質が悪い写真だったが異常はハッキリしていた。黒煙を吹かしており、各部の装甲と思わしき金属のパーツも所々で傷が入っている。幻想郷にとって異端の塊であるこれは、一体？

「驚いたでしょ！ 早苗が見てたようなマンガやアニメのような出来事だよ！ なんでも、あの天狗によると、何処からとも無く落ちてきたみたいで……ホントかどうかは知らないけど、噂では私らと同じように別の世界から次元を超えてやってきたかもしれないって言う話もあるし……だから神奈子、もうここに向かっていているって」

「別世界の、来訪者……なら、私は……！」

「……って、早苗！ どこに行くの!?!」

——こうしちゃいられない！

早苗は記事の内容を斜め読みした後、諏訪子の声を無視して胸の衝動に突き動かされるまま崖へと身体を向けた。早苗の中では今正に心が踊りだした。多分、諏訪子よりも、もつとだど自信がある。記事の内容を理解できた途端に、東風谷早苗は笑顔で空を眺めた。

早苗は只の人間ではない。守矢の風祝であると同時に、太古の昔から霊力を宿していた神の

子孫であった。それらは現人神と呼ばれ、代々先祖より受け継がれている霊力と呼ばれる力を行使して数々の奇跡を起こしてきたのだという。早苗は、その奇跡のうちの一つ、神風と呼ばれる力を使って崖下へ続く空中に暴風を巻き起こした。

早苗は、崖に向かって翔はぼうと考えたのだ。

「落ち着いていられるのですか。これは新たな一大事ですよ！ 外の世界の異物がもし被害をもたらすものだとしたら、それを真つ先に阻むのがこの東風谷早苗！ 幻想郷に訪れた異変の調査のため、少し神社を空けます！ 私がいけない間お留守番しつかりお願いしますね！」

「うええっ！？ 問答無用で私お留守番！？」

「急を要する事です！ 私が空けている間、戸締まりやご飯しつかりしてくださいね！」

諏訪子の驚く顔から目を離し、早苗は躊躇なく倒れるように崖へとその身を投げた。自分の体に絶え間ない暴風が襲いかかる。早苗は心を落ち着かせ、さも当然のように空中で体を捻って飛行機のように手足を思いっきり伸ばした。まるでスカイダイビングやバンジージャンプの体勢のように。だが、背中には命綱もパラシュートも存在しない。このままでは、落下で地上に激突して身体を潰してしまおう——早苗が普通の人間であるならば。

「行きます！」

だが早苗は先程起こした神風をその身に受け、空へと華奢な体を浮かばせた。先祖代々より

伝わる、『奇跡』と呼ばれている守矢神社の秘術だ。その奇跡の一つである『飛翔』は、神風による浮力に身体を預けることにより、人の身でありながら空を自由に飛ぶ能力だ。

——これは、一大事。そう、単なるお飾りの非想天則とは違う。私の人生のビッグイベントなんだから！

内心ではしゃいでいる自分に戸惑いながら、長髪と風祝の服を風になびかせて、絶好調のテンションから繰り出す全速力で目的地、山のふもとへと飛翔する。その速度は今までこの幻想郷の空で出したどんな自分の速さよりも速く感じた。身に受ける風がより強くなり、このまま、よりもっと加速できるんじゃないかと。

しかし、そんな気分もそれほど長く続かなかった。妖怪の山の崖の影から、自身の背後を追いかけてくる気配を感じた途端、早苗は進行方向をそのままに身体のみ後ろへと反転させ、姿勢を立たせた。

「この灵力の気配、山からの追手？　神経を逆なでするようなこの特有の荒々しさは……白狼天狗ですか」

早苗は昂ぶる心から意気揚々と厄介者の種族の名を口にして、溢れんばかりの笑みで追手の姿を捉えた。後方より近づきつつある少女。彼女は白狼天狗と呼ばれる種族の一人で、その種族はこの妖怪の山の中腹に群れて棲みついている。白狼天狗は、頭に犬耳を持つなど、人間と

は異なる体組織を持つ生物である。そして天狗という種族の名前を持つ通り、天狗のうちの種族の一つ。

天狗は皆警戒心が強く、烏天狗だろうが白狼天狗だろうが、天狗の住処の警衛任務に就いている天狗達は自分たちのテリトリーに無断で踏み入るものを決して許しはしない。迂闊にも早苗は舞い上がったばかりにいつもの飛翔ルートから外れてしまったようだ。でなければ律儀という言葉を体現したかのような白狼天狗が意味もなく自分を追っかけてくるはずもない。

こうなってしまったならどうするか？ 答えは決まっている。面倒事から逃れるには逃げることが一番だ。早苗はさらに風を巻き起こして加速する。本来、人体は飛行に向いていない形状だというのに、奇跡の神風は華奢な体を空気抵抗から守りつつ、前へ、前へと押し出した。が、とりわけ今朝の白狼はしつこい。堪らず早苗が一瞬だけ見やった白狼の先頭にもう一度視線を移すと、その白狼の顔に見覚えがあったことを気付く。

「犬走椛！ これはまた厄介な人に目を付けられましたか……」

「そういう貴方は山の風祝。今日はいつもの空中回廊じゃないのですか」

独り言が、椛の頭にある犬か狼そのものの三角の耳に入ったらしい。

「ちよつと面白そうな事があるので、ついついショートカットと洒落込んだじゃいました」
「それは貴方の勝手。どんな理由があろうとも、私達の区域に入ったケジメは受けていただき

ます。それが私達天狗のポリシーですから」

諏訪子と同じくらい童顔だが、その表情は冷えきった氷のように無表情。柊は淡々とした口調のまま、身体に不相応なほど巨大で沿った刀を携えて突進してきた。天狗の本気の速さはいくら奇跡の飛翔でも振り切れない。距離を瞬く間に詰めてくる。柊の姿を捉えるためにバック走状態の早苗は、逃げられないことに気付き表情を引き締めた。

——もう！　こんな時にまであの娘は真面目すぎるんだから……！

今朝の気分ならどんな妖怪よりも早く翔べそうだとも思ったが、所詮は気分でしか無いのか、犬走柊の鮮明になる姿を日にして早苗は少しだけ頬を膨らませた。

「山に勝手に現れたかと思ったら、さらには山の常識をかき乱す！　そんな守矢の風祝、今日こそお縄です！　天狗のテリトリーを不躰に侵したものがどのような目に遭うのかを、今日こそ思い知っていただくべき！」

「生憎、常識などかなぐり捨てました！　だって幻想郷は常識にとらわれてはいけない世界なのですからッ！！」

最高速に達しているだろう柊は、早苗の目の前で刀を大きく振りかぶった。早苗は懐に差していた守矢特製の御幣を得物として右手で構えた。その先端の紙片に靈力を集中させて、来たる柊の大剣の弧線に御幣をあてがう。すると、御幣は込められた靈力で至高の硬度となり、柊

の大剣を受け止めることに成功した。

「風となったこの早苗に、敵う妖怪などいません！」

「戯言ッ！」

早苗は唸声を切りつつ最初の唐竹割りを弾き返し、さらに御幣を横から叩きつけて、剣の動きを反らして躲かわした。普通の紙でしか無い、見せかけの御幣では不可能な芸当。可能にしたのは早苗の靈力を封じ込めてある由緒正しき、本物の御幣だからだ。早苗の世界のお祭りで使われるような、只の半紙の類ではない。靈力は他人の靈力と反発し合う性質を持っている。早苗は同極の磁石をぶつけるように、柁の靈力が込められている大剣に早苗の靈力が込められた御幣を当てて難を逃れたのだ。神風を持たない柁などの他の人間や妖怪がこの世界で自由に飛び回れるのは、その靈力の性質を直接飛行に応用しているからだ。早苗の元の世界で似た性質の現象で例えるなら、電磁浮上に近いもの。故に、至近距離で反発を受けるとその衝撃を殺しきれず、支えるものが何もない空中では大きく不安定となる。靈力のぶつけ合いで先に地面へ落として負けを認めさせることが、この世界における少女同士の決闘だった。その駆け引きに生命のやり取りは存在せず、あくまで負けを認めさせることがこの戦いの意義となる。柁の大剣は実際に斬れ味が存在するものの、刀身表面に靈力を纏っているのは、相手を殺傷させずに弾き落として穏便に『決闘』で早苗を打ち負かしたいがためであろう。

そう、これは言わば遊び。スポーツ同然の健全な戦いだ。早苗はこの明るい戦いのある世界に充足感を得ているからこそ、この世界で生きている。

「はっ！」

柊は怯むことなく、鋭い二の太刀である返しを繰り出してきた。早苗は見切り、背転して宙返りで逃れる、僅かに空気抵抗と神風の強弱を操作して身体に起きる推進力を意のままに操る。そのまま、元の体勢へと戻り柊が刀を再び構え直す間に接近した。踏み込んだと同時に、構えていた御幣を突き出し、霊力を込めて柊に向けて振りかぶった。

「墜ちなさい！」

早苗は懐から対妖怪用御札を取り出し、勢い良く繰り出した。柊は咄嗟に腰に携えていた刀を抜刀して切り払うが、その瞬間柊の目の前で札が爆発する。対妖怪用御札の正体は、早苗の霊力を内包する妖怪退治に特化した武器だ。柊に触れ、彼女が持つ霊力に反応して勢いよく破裂したそれは、最高速度で加速していた柊の体勢を崩すのに十分であった。

「不覚を取った……!? 待ちなさい風祝！ 待ちな——！」

体制を崩して失速する柊の姿を眺めて、その先に森があることを確認した早苗は、再び飛行

体勢へと姿勢を移して空を駆ける。

——あの様子なら、木に引っかけかかつてかすり傷程度で済みますよね。

早苗は今日も十分な実力が出せることを再確認し、数手で終わりを告げた幻想郷の決闘を済ませて目的の場所を見据える。荒々しい一時だが、出会い頭に意見の合わない少女同士がお互いを納得させるために霊力を用いて戦い合う。早苗の価値観からすれば短絡的に程があるが、それがこの世界の挨拶だった。この世界の常識だった。

早苗は杖を退けて、追いつかれないうちに離れようと再び空中を滑るように飛翔する。今の早苗を満たしているのは霊力を駆使して己の闘争本能を昂ぶらせることより、諏訪子から耳にした口ポットへの興味だけだった。

傷ついた剣

早苗は柵の追撃から逃れて妖怪の山のふもとに伸びる河原に着地し、川を下り続けていた。執念深い白狼天狗だが、山から極端に離れてまで追つては来ない。柵がいらないことを確認してからは、早苗も安心できた。靈力の使用は精神力を消耗し、使いすぎれば底知れない疲労感に苛まれる。いま早苗が地面に足を付けているのも、靈力の消費による苦痛を防ぐためだ。目的の為に無理をして墜落なんてしたら堪ったものではない。

「やっぱり、ここは綺麗ね……幻想郷の自然は」

早苗は歩きながら山の河原を目にしてそう言った。早苗の趣味の一つは散歩だ。早苗の世界では、もうこのような木々の生い茂った天然の光景は余程山奥の秘境でない限り存在しなかった。技術を身に着けた人間達による際限ない開発行為によって削られる自然。利権に目がくらんだ者による本来無用な投資で行われる環境に一切配慮しない建設作業。

早苗はそういった元の世界の様子が嫌いだった。それらの愚かな欲によって作り上げられてしまった自分の世界そのものも。幼い頃から外の世界の、欲に駆られた人間は自分の神の力をも利用しようと考える人間ばかりを相手にしてしまったのも原因だ。一度だけ、元の世界で少くない報酬目当てでメディアに出たことはあるが、現人神の末裔である由緒正しい自分を、

『珍しい芸ができる珍獣』としか見ない人々の視線はもう味わいたくなくなった。この世界の自然を眺めていると、元の世界の愚かしさを思い出す。が、それとは無縁で育った自然を目にして、自分の知る世界を目の前の光景で上書きしたかったからだ。

早苗が神社の書物から別次元への転移方法を知り、実際にこの前世代的なほどに自然豊かなこの世界にたどり着いた時は、大いに心が震えたものだ。さらには、この世界の人妖は皆自分と同じように霊力の概念を知っていて、東風谷早苗という個人を特別視することがない。元の世界では最早異端扱いされる守矢の血筋が、普遍的な存在でいることしか許されない世界、幻想郷。

この世界に諏訪子達と共に来て、初めて早苗は自分が普通の女の子として生きている実感を得た。誰の目を気にすることもなく自分の力を好き放題に行使することを許される。立ち向かってくる妖怪が目の前に現れたならば、神の力を以って成敗できる。まるで本当に思い描いていた絵空事が現実になったみたいで最高の気分だった。

早苗は少女漫画や、アニメが好きだ。そして自分がそのキャラクターのように強く在れるのは憧れが叶った瞬間だった。そのことで調子に乗り、幻想郷に来てまもなくこの幻想郷の巫女、博麗霊夢に幻想郷最強の巫女の座をかけて決闘を申し込み、敗北を喫することになったのは記憶に新しいのだが。

そんなこともあつたと河原を歩きながら思い出していた中、木々の揺れる音や森の奥の生き物の声、河原の流水音とは異なる響きが遠くから段々と大きくなっていた。鉄と鉄がこすれる激しい金属音だ。いつの間にか目的地の河童の作業場に到着していたらしい。目の前を見通すと、河童と呼ばれる種族の妖怪が山から流れる川の底から這い出してきた。でてきた彼、彼女らは防水性の作業服姿で日の前を横切っている早苗の姿など気にもとめてないようだ。背負う防水性の袋の中に沢山の金属の部品らしき荷物を抱えて河原の縁へと集まっている。

歩きながら目でその先を追うと、河原の直ぐ側に設けられていた広場が存在していた。その広場に建造されているのは巨大な工場というべき施設だ。見上げるほどの高さの半ドラム上の屋根は、河原近くの木々の枝に囲まれており、今まで実際にここに來ることが無かった早苗はこの付近にこんな建築物が存在するなんて知らなかった。荷物を抱えた河童達が入っていく正面の両開きの鉄扉は開放され、中で河童が群がって何かの作業をしているようだった。

一体ここで何をしているのか。早苗は河童の一人に神奈子の関係者であることを告げると、あつさりとは案内された。早苗達は、河童の種族に技術提供を行っている関係であり、親しい間柄に位置している。つい先日まではここで非想天則なるアドバルーンの建造を行っていたとあるいは諏訪子伝いに聞いていたが、ただのハリボテ同然にさっきの河童が持っていたような複雑な部品が必要ないことは素人の早苗にも分かる。それほど、この世界に來たあの写真の

謎の存在は、河童の手すら借りないといけないものだろうか。早苗は作業場の中を歩いて視界を慣らすと——そこに聳えていたモノを理解した途端。圧倒された。

「ああッ……」

思わず口を抑えるほどの衝撃。一目見た瞬間に、心を奪われた。

非想天則なんて鉄くずを寄せ集めた見せかけの人形とはわけが違う。修理されたばかりの装甲を全身に纏う、作業場の中で沈黙を保つ鉄灰色の巨軀。それは、武器を全身に備え持った巨大で鋼鉄の人体と言うべき存在だった。

まず目を引いたのはそのフォルムを象る鋭角な金属装甲。溶接の合わせ目すら存在しない極めて洗練された姿は、鍛えられたアスリートを連想させる。全身の金属体はまるで全身を鎧で固めた歴戦の戦士のようにも見える。装甲の隙間に存在する冷却ルーバーからは、この機体から生み出される高熱を勢い良く吐き出すのだろうか。

腰部、背部に装備されている、取っ手らしきパーツの付いた装備物は、恐らくこの巨大な人型兵器のスケールに合わせて造られた携帯武器だろう。銃に似た物と、折りたたまれて収納されている刀に似たものが見受けられる。人間と同じ五指を持った手と、地面にしっかりと自重を支えている脚部は、人間のそれと金属的な意匠を除いて変わらない役割を果たすのだろうか。敵に脚部の方は周りの河童が『損傷が少なかった』と零しており、修理の段階からこの格納庫

の中で立ち姿勢を保っていたらしい。

極めて人間に似た姿の建造物ではあったが、一方で人間には無い決定的な違いが存在していた。人間の背中に当たる部分に存在する、翼だ。巨大な機械人形の背部に、巨大な一對の翼が存在する。本体と同じように鉄灰色の装甲で象られた翼は、ナイフの先端部の様な危うき鋭さを羽一つ一つに持つ。まさか、この巨体は飛ぶのか。重力に捕らわれない自分達のように。まさか、ただ見栄のために取り付けられている訳ではないだろう。

「アニメじゃない……ホントのこと……」

非常識の塊。非現実的な概念の塊が早苗の心を震わせていた。

「気に入ってもらえたかな？ 早苗」

そう言っただけか自信ありげに気安く呼んできた声に反射的に振り向いた。そこにいたのは守矢神社のもう一柱の神、八坂神奈子だった。身体の曲線を覆うのは血のように鮮やかで派手な赤い装束で、しめ縄を髪飾りのように頭に付けている彼女は酷く鮮烈な印象だが、幻想郷に来てからはその姿にも見慣れてしまった。何せ早苗にとって肉親同然であり、彼女の普段着の格好だからだ。

彼女は連日朝に山を降りては、河童の元でアドバルーン制作に付きつきりだったはずだが、特に疲労の様子は見られない。やはり妖怪は人間とは根本的に身体づくりが違うのか。

「神奈子様、おはようございます。諏訪子様からある程度聞きましたが、これは一体……」

「早速の質問か。そうだな……コイツは外の世界の代物だ。……と言っても、私達の住んでいた世界とは全く別の技術で作られているがな」

「そんな、まさか」

「驚くのも無理はないね。多分これは、私達の世界とは別の空間から転移してきたと私は見ている。それにこれは紛れもない、兵器だよ。人間と人間が争うために作られた技術の塊。過去に諏訪子へ戦を仕掛けた私には分かる。コイツは……人が争いに勝つための意思が込められたマシーンだよ」

「争いに勝つ……意思が込められた……」

神奈子の言葉を反芻してロボットの光のない瞳へと視線を合わせる。緑色の宝石のようなセンサーアイは、この機体の主を待ち望んで眠っているようにも見える。コックピットハッチと思われる腹部が開いていることから、この機体は有人で駆動するのだろうか。

「だれか、乗っていたのですか？ あのお腹の部分……」

周辺には河童妖怪ばかりで、搭乗席に乗っていたらしい人物の姿は見当たらない。

まさか、機体は修復されているが墜落で中身の人間が死んだのではないかと想像する。幾ら人間でも乗り込んでいる機体ごと真正面から墜落したら衝撃で身体が叩きつけられてグチャグ

チャだ。

「ああ、『彼』は生きているよ。数日前ここに墜おちた時に河童の一人が付きつきりで看病していたらしい。今朝も確か、そのあたりをうろついていたはずだが……」

早苗に問われ、隣に立った神奈子は気付いたように周りを見渡す。河童の色とりどりの作業服姿達の中、神奈子と一緒に早苗も作業場を一瞥していると。

「ああ、いたよ。あの子だ」

神奈子がそう言いながら肩を軽く叩いて視線を促してきた。その先にはゆつたりとした和装に身を包んだ男性と、水色のワンピース状の作業服の河童の少女がいた。

「もう、立てるのか？ お前」

「ああ。あんまり寝てばかりいる気分じゃないしな……里の医者だっけ、あの兎耳の女の子からもお墨はつけてもらっているんだ。もう看病なしでもどうにかできるって」

「ホントかよ、それで無理して私の手間を増やすなよな。ったく」

興味が向いた男の声は鮮明に感じられた。痛みで引きつった笑みのまま、隣の小柄な少女に支えられて弱々しく歩いている。

少年だ。声変わりが済んだばかりであろう高い声とあどけない面持ち。背丈も然程男性という枠の中ではとりわけ大きい方ではない。見た感じ歳も十七である自分とほぼ同じぐらいだろ

うと思った。隣の河童の少女——確か、この作業場の保有者である、河城にとりだったか。彼女と見比べていると兄妹のようにも見える並びだ。にとりの方は妖怪だから見た目で生きた年数を判断できないが、外見年齢はだいたい中学生程度の女の子に見える。生意気な口ぶりをさつきから少年に突き刺しているが、俯きがちで心配そうな顔色から、口とは裏腹に相当気にかけているのだろう。

少年の和装のその奥、素肌には巻かれている包帯は墜落の時に受けた傷に巻いているのだろう。その汗を浮かべている表情も、口の割には痛みがかなり響いている様子だ。

「彼はお前と同じ、幻想郷ではない別の世界の人間さ。かといって私たちの世界の住人でもないみたいだけどね」

癖つ毛のある髪、切れ長だが、少年らしさを持つ丸みを帯びた瞳。

彼の姿を見るなり、早苗は懐かしい想いに駆られた。彼の瞳は、早苗の記憶にあるかつて接していた子供のそれに似ていたから。

——なんで、いきなり、あの子のことを私は……

血のように紅い彼の瞳の印象が、早苗の記憶に焼き付いている血溜まりに溺れた少年を思い起こさせる。それは今朝日覚める前にみた、つい昨日のことのように思い出せるビジョンで、早苗が目をそらしたい光景だった。